

中国における回族ムスリムの重層意識と イスラーム教の空間構築に関する考察

——中国ムスリムと清真寺調査を中心に—— (2)

Multiple Consciousness and Space Construction of Hoi Muslim in China
—Through Researches of Chinese Muslim and Mosques— (2)

高 明 潔

GAO Ming Jie

樋 口 義 治

HIGUCHI Yoshiharu

愛知大学現代中国学部

Faculty of Modern Chinese studies, Aichi University

E-mail: garouna@aichi-u.ac.jp

愛知大学文学部

Faculty of Literature, Aichi University

E-mail: yhiguchi@vega.aichi-u.ac.jp

Abstract

This paper presents the multiplicity of Hoi society in Ningxia, Xinjiang, and Beijing of China through the visits of those religious facilities, the symposium, and the home visits and the interviews. The purpose was to view the symbol and its common features of Islamic cultural system maintained in Hoi society until now through the following two points.

- i) The features and the multiplicity between the social self-identity and the religious Islamic-identity of Hoi people who have two different positions in China society.
- ii) The relationship between the culture and society of Hoi and Islam through the structure and the function of the mosque.

はじめに

1. 本論文の目的

本論文は、平成15、16年度文部科学省科学研究費補助金『基盤研究(c)「イスラームにおける中国——現代イスラームの秩序認識とその中国理解の複合的構造研究——」(代表者：鈴木規夫・分担者樋口義治・高明潔)によって行われた調査研究(具体的な調査活動

は注1の表を参照)の成果に基づいて再編集したものである^(注1)。

本論文の主な研究対象は中国ムスリムの代表的存在である回族社会である。本論文は特に、I:社会的・宗教的に異なる身分に分けられている回族出身者の自己認識から見る回族のイスラーム・アイデンティティの特徴について;II:モスクの機能から見る回族社会・文化とイスラーム教との関連について、という二つの側面を通して、回族社会に維持されているイスラーム的文化体系の表象とその特徴の共通点を検証することを目的とする。

回族は中国の55の少数民族集団の一つである。人口は900万あまりで、全国各地に広く分散している。本論文は、中央アジアに位置している新疆ウイグル自治区(回族人口75万あまりで、新疆の総人口の約4.5%を占める)における回族社会;中国の西北地域に位置している回族の本拠地である寧夏回族自治区(回族人口200万あまりで、寧夏総人口の約34%を占める)の回族社会と中国の政治・経済の中心地である北京(元・明時代から中国のムスリムの中心の一つ)の回族社会を対象として、それぞれの地域において、イスラーム教施設の見学と座談会、家庭訪問・インタビューというような現地地で得た第一次資料をもとに、さらに現地地で蒐集していた文献資料を参照した上でまとめたものである。こうした広範囲での調査を通して、回族社会全体が持つイスラーム的文化体系の表象とその特徴の共通点を抽出することが可能となったと考える。

2. 本論文の用語表記について

ここでは、まず本論文に使用されている回族のイスラーム教の宗教用語、およびその宗教生活を示す固有用語や事項を【表1】にまとめる。これに基づいて、本論文において、宗派や宗教組織を示す用語はカタカナ、風俗習慣や年中行事を示す用語は回族が用いる固有漢字によって表記する。以下、どちらの表記においても、改めてその用語の意味合い・アラファベット・漢字などは加えないことにする。

【表1:回族の宗教用語・固有用語】

回族用語と 主な固有漢字表記	日本語のカタカナ表記とその他の漢語表記
格底目・格底木	カディーム～Qadim 老教とも言う。中国イスラームにおける正統であると認識される。「門宦」は設けない。新疆の回族に「大坊」と呼ばれる。
伊和瓦尼	イクワーニ派 Ikhwan 「新教」と呼ぶ。門宦制度に挑戦する宗派。
苏菲	スーフイズム～al-sufismu を指す。
四大門宦	スーフイズム～al-sufismu の四宗派を指す。新疆の回族に「小坊」と呼ばれる。17世紀中頃中国に伝来。内部には四つの門宦に分かれる。門宦はスーフイズムの中国語の呼び方で、主にその下位教団を指す。
嘎迪林耶	カディリーヤ～Qadiriyyah スーフィー派四大門宦の一つ。仏教と道教の影響を受け、教団が甘粛・寧夏・青海・雲南・新疆に分布する。

哲合忍耶	ジャフリーヤ～Jahry-yah スーフィー派四大門宦の一つ、「公開的・高い声で唄う」の意味。「新教」と「高声派」とも言う。教団が甘粛・寧夏・青海・雲南・新疆に分布する。
虎夫耶	フフィーヤ～Khufiy-yah スーフィー派四大門宦の一つ、「隠密的・低い声で唄う」の意味。「老教」や「低声派」とも言う。ウイグル族の教団が多い。教団は甘粛の隣夏，蘭州，寧夏に分布する。
庫不林耶	コブリーヤ～Kubriya 「大者に到る」の意味。スーフィー派四大門宦の一つ，甘粛省の東郷族地域に分布する。
清真寺	イスラームの礼拝所を指す。モスクとも言うが，アラビア語のMasjid～Masjidからの呼び方。中国では「清真教」でイスラーム教を指す。
道堂	スーフィー派回族ムスリムの修業場を指す。「ハニカ」や「ジャヴヤ」とも言う。漢語では「静室」や「静房」とも呼ぶ。
可蘭經・古蘭經	クルアーン；コーラン。
柝克・邦克	ペルシア語 Bang～バング。大きな声，長く伸ばす声。礼拝呼びかけ。
拱北	ゴンバイ～Qqubba (墓所：クッバ)
阿訇	アホン・アーホンド～Akhwund 宗教指導者・教長。
满拉	マウラー，ムッラー～Mawla, mulla 宗教学生。
「大浄」・「小浄」	アラビア語 Taharah～清潔さの意識で，中国語の当て字は「塔哈拉」である。「小浄」は礼拝する前にきれいな水で手や顔や足元を洗うことと口をうがいすること。「大浄」は「烏斯里」(アラビア語 Ghusl)とも言う。礼拝をする前の沐浴を指す。回族ムスリムの義務の一つ。
水房	清真寺に設けている「小浄」や「大浄」を行う沐浴室。小浄室は共同で利用することが可能で，日本の銭湯の共同施設に似る。大浄室は個室で，シャワー式で設けていて，共同利用は禁止される。
主麻	ジュムア～Jumah イスラーム暦の礼拝日，西暦金曜日の集合礼。
朝覲 哈吉	Khwajaの意識，メッカ巡礼を指す。音訳は「哈吉」。イスラーム教暦12月8-12日の間に行う。ハッジ・ホージャ～Khwaja メッカ巡礼経験者を指す。先生，師，貴人を指すが，回族ムスリムの場合は宗教指導者をも指す
尔麦里・尔埋里	アマル～Amal 行い，主として祖先追悼のお勤め
乜帖・乜贴	Niya, Niyatの意識。捧げる意図，気持。回族ムスリムでは上層部の貧困層信者への寄付や信者の清真寺への寄付。
巡礼	Umrah～ウマッル；ハッジ以外の期間中のメッカ巡礼を指す。「小朝」「副朝」ともいう。
教主・穆勒什德	ムルシド～al-murshid 宗教指導者を指す。主にジャフリーヤ派が用いる。
伊麻目・伊馬木	イマーム～imam 宗教指導者・教長を指す。
帰真	アラビア語 Maut～マイトの意識。原意は「死亡」である。漢語音訳は「冒台」；「無常」ともいう。
教坊 「寺坊」とも言う	もっぱら一つの清真寺を祭る教区を指す。規模それぞれ。教坊には「郷老会議」を設けたが，現在「寺管理委員会」に変更。教坊間の相互干渉はない。
古鹽邦節・宰牲節	アラビア語 lid Al-adhaの意識。イスラーム教暦12月10日，メッカ巡礼の最終日に開催する大規模行事。

肉孜節・開齋節	ペルシア語 Rozah の音訳、新疆回族が持つ用語。西北部回族は「開齋節」と言う。アラビア語 Id Al-Fitr の意訳で、イスラーム教暦10月1日。9月の齋月の断食を終えた後の盛大な行事。
進教・帰正儀	回族の非ムスリムがムスリムに加入する「加入礼」を指す用語。帰正儀は明代からの用語で、現在では進教を言う。

〔調査記録をもとに、『イスラーム世界事典』『殉教の中国イスラーム』『伊斯蘭教辞典』『宗教大辞典』『回族穆斯林常用語手冊』などを参考した上作成〕

3. 本論文の構成について

本論文の全体構成は以下の通りである。紙面の制限で、二回分載する形で公表することになっている。本誌の前号では、下記の二の6節までを掲載している。本号では二の7節から掲載する。

はじめに

一. 回族におけるムスリム・アイデンティティの重層性の表象

——インタビューを中心に——

二. 回族清真寺・拱北からみる中国におけるイスラーム教の空間構築

1. 寧夏「納家戸清真大寺」——スーフィズム・フイーヤ派——
2. 寧夏「吳忠清真寺」——スーフィズム・フイーヤ派——
3. 寧夏「同心清真大寺」——ガディーム派——
4. 寧夏「洪崗子拱北・清真寺」——スーフィズム・フイーヤ派洪門宦——
5. 寧夏「吳忠板橋道堂・拱北」——スーフィズム・ジャフリーヤ派板橋門宦——
6. 寧夏「洪樂府道堂・拱北」——スーフィズム・ジャフリーヤ派沙溝門宦——
7. 寧夏「韭菜坪清真寺・拱北」——スーフィズム・カーディリーヤ派——
8. 寧夏「沙溝道堂・拱北」——スーフィズム・ジャフリーヤ派沙溝門宦——
9. 北京市朝陽区「下坡清真寺」——カディーム派——
10. 北京朝陽区「常營清真寺」——カディーム派——
11. 新疆ウイグル自治区吐魯番市「東大寺」——カディーム派——

考察

1. 回族出身者のムスリム・アイデンティティにおける重層性
2. 清真寺の建築にみる中国イスラーム教の空間構築
3. 清真寺にみる中国イスラーム教諸派の歴史とその政治的運命
4. 清真寺にみる宗教的・社会的機能について

結語

二. 回族清真寺・拱北からみる中国におけるイスラーム教の空間構築

7. 寧夏「葦菜坪清真寺・拱北」——スーフイズム・カーディリーヤ派——

葦菜坪拱北は海原県政府の所在地から38キロ離れる九彩郷内にある「葦菜坪」と呼ばれている所に設置されている【図1】。かつて、この地は野生葦の生産地として名高くて、「葦菜坪」と称されていた。「葦菜」と「九彩」の発音が一緒なので、現在、「九彩」を用いてこの地を示すことが多い。「坪」は山間部にある平地を指す用語である。

葦菜坪清真寺はスーフイズム・カーディリーヤ派の楊門門宦に属する。カーディリーヤ派楊門門宦のムルシド楊保元は、カーディリーヤ派馬門門宦第七代のムルシドであったが、のち楊門門宦を創出し、後河子を布教の拠点として活動した。楊保元が清代の光緒8年(1882年)に歿後、その拱北が後河子拱北に設けられた。「後河子拱北」は現在の青海省大通回族土族自治州北川後河子にある。

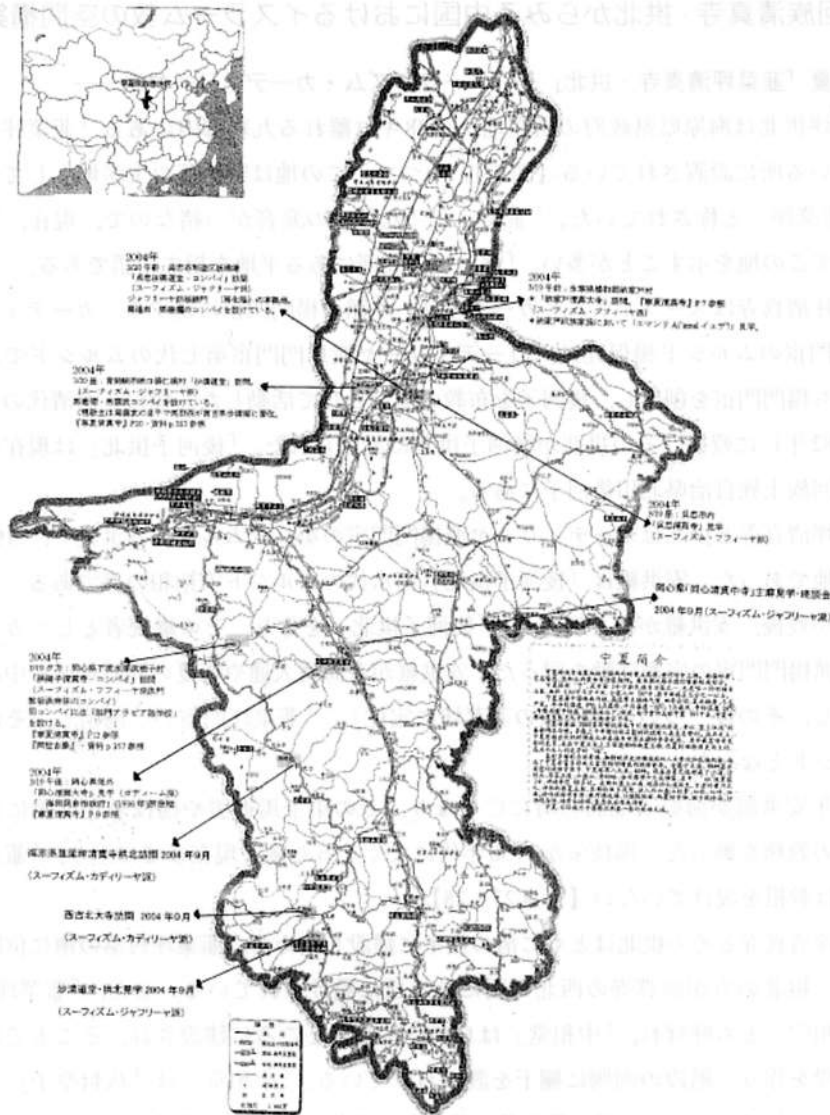
葦菜坪清真寺と拱北はカーディリーヤ派楊門門宦の第八代ムルシド安洪維(?-1920年)の本拠地であった。安洪維は「後河子拱北」第六代のムルシド安裕和の孫である。上記の楊保元が歿後、安洪維が彼を埋葬し、「後河子拱北」を作り、その継続者としてカーディリーヤ派楊門門宦の宗教活動を司った。安洪維が青海省大通や寧夏の固原地域を中心にして布教し、その後、ついに海原県の葦菜坪に定住し、「葦菜坪門宦」を創始し、その初代のムルシドとなった。

1920年安洪維が海原大地震の時に亡くなり、その弟子馬進雲や楊枝栄が前後に葦菜坪清真寺の教務を勤めた。楊枝栄が1950年代になくなった後、現在までに至り、「葦菜坪門宦」には教祖を設けていない【写真27・28】。

葦菜坪清真寺とその拱北はともに清の後半に建設し始めた。葦菜坪村落の南に位置しているが、拱北の方が清真寺の西北方面にある丘に設けられている。また、「葦菜坪拱北」は「中和堂」とも呼ばれ、「中和堂」は丘の一番高いところに建設され、そこまでの道沿いは階段を作り、階段の両側に欄干を設けられている。「中和堂」は「八封亭子」と「道堂」に分かれていて、この派の第五代、第七代の教祖の拱北が設けられている「八封亭子」が真中にある【写真29】。その両脇には数百軒の道堂(出家信者が修道用の静室)が設けられている。

「中和堂」は中国古典式の建築であるが、その煉瓦の彫刻は西域からやってきたムスリムの祖先らから伝えられてきた技術によるものであったと説明された。この「中和堂」の一部は文革時代に破壊されたが、その修復は1980年代後半から始まり、現在海原県政府によって「県レベルの重点文化財保護単位」と指定されている【写真30】。

葦菜坪門宦はその他のスーフィ派の門宦と同様で、『コーラン』や『聖訓』を主な教義や信仰をとしている。修業面では、以下の点がその他の門宦と異なる。



【図1：寧夏調査先分布図（2004年3月・9月分）】

- i) 信者が結婚せず，出家修業。
- ii) 信者の正しい道を求めるために師を訪問し遊学する行為を修業として認める。
- iii) 信者が毎年同一宗派のすべての教坊を一回りすることを修業の一つとして義務付ける。
- iv) 毎年の正月一日，三月二十五日，八月十五日と九月九日には，尔麦里を行うことは信者の修業とされている。



【写真27】 蕪菜坪清真寺表門・2004年9月



【写真28】 蕪菜坪教祖と卒業した学生・2004年9月



【写真29】 蕪菜坪表門前清真寺・2004年9月



【写真30】 蕪菜坪中和堂対連・2004年9月

現在、蕪菜坪門宦に属する教坊（教団）は全国各地において十五ヶ所が設けられていて、いずれの教坊の中にも、信者のための修道用の道堂（静室）と共同墓地が設けられている。また、10数万人あまりの信者を有し、主に寧夏海原、固原県あたり、青海大通、甘肅蘭州などに集中している。

8. 寧夏「沙溝道堂・拱北」——スーフイズム・ジャフリーヤ派沙溝門宦——

沙溝道堂は西吉県【図1】沙溝郷沙溝村に設置されている。沙溝郷は県政府所在地の町の北部にあり、町から40キロを離れている。沙溝郷は11の村を管轄し、人口は14,000あまりで、100%が回族である。郷政府は沙溝村に設けられている。沙溝郷全体は山間部に位置し、それぞれの村が分散し、貧困層が多い地区である。

2004年9月23日に、沙溝道堂・沙溝拱北を見学することができた。もともとは前述した6節の洪樂府道堂の馬孫烈氏の関連で、西吉地域の訪問は微妙となったが、我々の道堂や拱北を見学する目的を配慮され、沙溝村に短い滞在時間を得た〔本誌前号本論文(1)二の6節参照〕。

沙溝道堂は中国スーフイズム・ジャフリーヤ派沙溝門宦の第七代ムルシド馬元節（経名ムハンマド・ヌール）の本拠地であった。馬元章（1853-1920年）は中国スーフイズム・

ジャフリーヤ派初代のムルシド馬明心の四代の孫である。雲南省で生まれ、父親馬世麟が1856-71年間の雲南の回民起義の期間中に遭難した。その後、彼と弟馬元超が雲南から甘肅省張家川に逃れた。その間甘肅省で「宣化崗拱北」を設けた。「宣化拱崗拱北は前述5節の第五代ジャフリーヤ派ムルシド馬化龍とその息子を祭る拱北で、馬元超（1859-1929年）により守り祭られていた〔本誌前号本論文(1) 二の5節参照〕。

1897年、馬元章が辺鄙な西吉沙溝村に逃れ、ジャフリーヤ派を振興するために、沙溝門宦をつくった。1911年馬元章がすでに亡くなった馬進城（前述5節の第五代ジャフリーヤ派ムルシド馬化龍の長孫）をジャフリーヤ派の第六代ムルシドとして尊い、自分は第七代ムルシドとしてその地位を継いだ。その後、彼の努力によって中国スーフイズム・ジャフリーヤ派が馬明心と馬化龍に続き、第三度目の復興期を迎えることになった。

馬元章が沙溝村において馬明心によって伝えられてきた中国スーフイズム・ジャフリーヤ派の教理を継いだが、祖先馬明心の「伝賢不伝子」という宗教伝承制度を「父伝子受」のように変更し、また、祖先の清廉的、富を取斂せずという生活理念を変えた。このため、彼以降の沙溝門宦のムルシドのほとんどがその地方の裕福でかつ有力な郷紳になった。1920年、馬元章が海原大地震^(注2)で亡くなり、彼の後任は前述6節の第八代ムルシド馬震武であった。馬元章の拱北がここに設けられているため、沙溝村は「沙溝拱北」とも呼ばれている。1939-1941年の間に、沙溝村は回民起義を起こしたことがあった。

また、1960年代後半からの文革時代では、沙溝村における清末に建てた道堂や拱北や清真寺のすべては破壊されたが、1980年以降、拱北や清真寺が次第に再建されてきた。沙溝清真寺は西向きで、アラビア風に建設されている【写真31】。

沙溝清真寺の東北側にある丘には沙溝門宦の拱北を設けている。拱北は山にそって建てられ、外観は公園のように見える【写真32】。その中には馬元章の拱北がある。他にも数多くの沙溝派の重要人物の拱北がある。また、この地は女性の立ち入れが厳しく禁止されている【写真33】。沙溝派の信者はこの墓地に埋葬されることを望むといい、現在、沙溝清真寺や拱北は沙溝派の重要なシンボルとなっている。

また、調査の日には沙溝村民の家庭を訪問することもできた。沙溝村の村民は皆沙溝派であるという。彼らは東南から西北まで清真寺と拱北を半円形に囲んで集中して居住している。その住宅は家族単位で、一家族は一つの院子（庭）に集中し、一つの院子には「外院」と「里院」を分けている。「外院」は若い世代の家庭、「里院」は年寄りの世代であると説明してくれた。ま



【写真31】沙溝清真寺表門・2004年9月



【写真32】沙溝拱北表門・2004年9月



【写真33】拱北内部・2004年9月

た、すべての院子が縦順にきちんと並べられているから、その横脇には土地が空いていて、その空き地である横地は北京の胡同のように見える。

また、馬元章の時代以来、現在に至るまで、ジャフリーヤ沙溝派が寧夏西吉、海原、固原、隆徳、静寧地方の260の教坊（教団）、甘肅省の隴東地区の130の教坊、新疆などの地域では40あまりの教坊を持っていたといわれ、信者が約10万人に及んでいる。沙溝派の伝承のルートは馬明心→穆憲章→馬達天→馬以德→馬化龍→馬進成→馬元章→馬震武→馬孫烈とされている。

9. 北京市朝陽区「下坡清真寺」——カディーム派——

下坡清真寺はカディーム派の清真寺で、「南下坡清真寺」とも言う。北京市朝陽区朝陽門外の繁華街と外国側の駐在機関を揃えている二条南口路南（朝外二条129号）に設けている。現在、下坡清真寺を中心にその近くに住んでいるのは回族の人々である。若い人々が普段は、それぞれの職場に通っていて、金曜日の集合礼や結婚式・葬式を行う際、下坡清真寺に集まってくる。普段ここに集まっているのは年寄りが多い。

下坡清真寺は「下坡」という地名によって命名されたのである。「下坡」は地勢の比較的低い場所を指す用語である。下坡清真寺は清の康熙初年に建っていたという伝説があるが、正式な記載はない。当時、地元の馬という苗字を持つ富裕なムスリムの投資を中心に、付近に住むムスリムの援助を集めた上、建てられたという説がある。もともと寺内にはこの寺を建設する経緯や出資メンバーを記載する碑文があったが、1960年代の文革時代にはこの碑文が無くなった。このため、この寺に関する文献資料の中には、寺の創建年代についての記載はない。

かつては、下坡清真寺の北部には「上坡清真寺」があり、下坡清真寺より大規模に設けられているから「大寺」と呼ばれ、それに対し、下坡清真寺は「小寺」とも呼ばれていた。1948年の頃、国民党の軍隊が上坡清真寺の場所に建物を建築するため、上坡清真寺を取り壊した。現在、かつての上坡清真寺の場所に「北京市朝陽区イスラーム協会」が設

立されている。

文革時代には、下坡清真寺の宗教職能者が批判や闘争の対象とされ、回族ムスリムの宗教活動も禁止され、寺院所有の財産が全部没収され、寺院が他用された。但し、寺院の建物は大きな破壊にさらされなかった。それはこの寺は中国共産党における初期の革命史との関わりがあるからとされている。

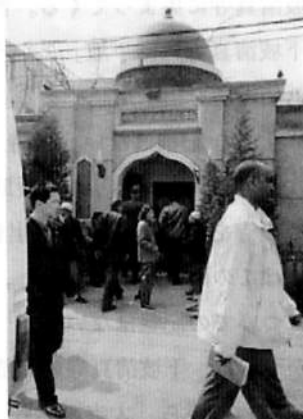
1920年代、天津や北京地域で有名な回族出身の革命家で共産党員である馬駿が、1928年に国民党の反動派の軍閥張作霖に殺害された後、当時の下坡清真寺の阿訇であった胡氏が彼の遺体を取り戻し、下坡清真寺で彼のためにムスリムの葬式を挙げ、「馬家坟」（馬一族の墓の意味で、今日の日壇公園）と呼ばれた回民公墓に埋葬した^[注3]。また、回族のムスリムがその墓に碑石を作り碑文を彫った。その後、馬駿が共産党の「回族革命烈士」との追認を受けた。1950年代初期、回族がその碑石を日壇公園から下坡清真寺に移し、下坡清真寺の東南側にある女性用の礼拝堂の前に建て、現在に至っている。今後、下坡清真寺の中に「馬駿烈士記念館」を作り、それをもって若い世代に対して革命教育を行うことが予定されている。

1984年、北京市朝陽区の古い建築を改修するチームが、休日を利用し無料で下坡清真寺の礼拝堂を改修した。この出来事が「回・漢民族が一致団結」の看板とされてきた。下坡清真寺は中国的建築とアラビア的建築の風格を併せ持って建設され、8畝（中国の1畝は6.667アール）の面積を占めている。アラビア風の表門は東向きで、入口の上には「清真礼拝寺」と書いてある【写真34】。

清真寺全体は庭園のように作られている。入口から入ると真正面は「影壁」という表門と向かい合っている壁があり、その両脇が礼拝寺に入る門である【写真35】。東向きの礼拝堂は庭の真中に設けられている【写真36】。その両側が事務室や水房、女性用の礼拝堂や売店を設けている。売店には礼拝や葬式用の帽子などを始め、イスラーム教関係の本も数多く並んでいる。

平日にはこの寺に礼拝しにくるムスリムは100人あまりで、金曜日の主麻では300人以上、重大な宗教祭りのときは1000人以上が集まる。

近年、北京の旧街道を改造するにつれて、かつて下坡清真寺の周辺に住む回族の一部が新たな居住地に引っ越した。しかしながら、彼らは依然として下坡清真寺に戻り礼拝活動を行っている。また、ここでアラビア語を学んでいる回族の若者がいる。彼らによれば、ここでは学費を払わなくても、阿訇が無料で教えてくれるということである。近年、このような回族の若者がますます増え



【写真34】下坡清真寺表門・2004年3月



【写真35】下坡清真寺入口の影壁からはいってきた外国人ムスリム・2004年3月



【写真36】下坡清真寺禮拜堂・2004年3月



【写真37】下坡清真寺に禮拜にきた外国人ムスリム・2004年3月



【写真38】下坡清真寺禮拜堂前で次の禮拜を待っている国内外ムスリム・2004年3月

てきたという。

分担者が下坡清真寺を訪問したのは3月26日の金曜日であった。その日は主麻なので、下坡清真寺の周辺に住んでいるイスラーム諸国の領事館の駐在員やビジネスマンが相次いでやってきて、回族と一緒に禮拜をしていた。ここでは、サウジアラビア、イラン、パキスタン、リビア、国連のイスラーム諸国の中国駐在員、また中央アジア諸国ビジネスマンなども下坡清真寺において禮拜を行う【写真37・38】。

また、下坡清真寺はムスリムの葬儀所でもある。回族ムスリムのみならず、周辺に住むイスラーム諸国の外交官やビジネスマンの葬儀もここで行う。清真寺の表門の左側の壁には「北京市会回族殡葬管理处」という小さいプレートが掛けられている【写真39】。そして、重要な宗教行事を行う際、イスラームの国々の駐在員がここに集まってくる。下坡清



【写真39】「北京市会回族殡葬管理处」のプレート（下坡清真寺表門）・2004年3月

真寺は中国ムスリムとイスラーム諸国のムスリムとの交流しあうもっとも重要な窓口であることが知られている。

下坡清真寺には「寺管理委員会」を設けている。阿訇とその寺を祭る付近の回族ムスリムの長老などから構成され、『下坡清真寺管理委員会分工』（寺管理委員分担役割）などの規定がある。

10. 北京朝陽区「常営清真寺」——カディーム派——

常営清真寺は北京市朝陽区常営郷に設けられている。常営郷は北京の東部にあり、面積は11平方キロで、四つの村で構成されている。11,000あまりの人口のうち、回族の人口が7000人で60%以上を占めている。「常営」は回族出身者の苗字で命名された地名である。明太祖朱元璋には名高い二人の回族の将軍がいて、その一人は「常遇春」という、彼と彼の兵士はこの地で駐屯したことがあるため、彼を記念するため、この地を「常営」と命名したという伝説がある。

常営清真寺はすでに500年以上の歴史を持っている。清代に作られた《長(常)営清真寺重建碑記》によると、常営清真寺は明武宗正徳年間(1506-1521年)に建設し始め、その後、清代の嘉慶元年(1796年)に再建され、嘉慶三年に完成され、現在の常営清真寺の基礎と建築風格を築いた。

1939年の春、日本軍が常営清真寺の西側に無線電信局を設けようという動きがあった。当時の楊万録阿訇がそれに反対するために、宗教界の有力者を動員し、当時の日本軍の支配下にある「華北回教連合会」の機関長茂川と直接に交渉しあった。ついに当時の日本軍の最高長官岡村寧次によって「建築場所を変更」と公示するに到った。それ以来、楊万録阿訇が「愛国愛教」の看板人物として、その事績が現在に至ってまで宣伝されている。

1960年代入ると、宗教活動が禁止されるにつれて、常営清真寺での宗教活動やそれへの管理も停止状態になった。その宗教活動が回復を始めたのは文革時代を終えた後の



【写真40】 工事中の常営清真寺表門（東向き）
とその前の道路・2004年3月



【写真41】 工事中の常営清真寺の庭・
2004年3月

1979年であった。その後、常営清真寺は1983年、1993年、1998年の数度の再建を経てから、現在の規模までに建築された。また、2004年3月に分担者がこの寺を訪問したとき、リフォーム工事をまだ進めていた【写真40・41】^{〔注4〕}。

常営清真寺は中国古典的建築として設けられ、縦と横の幅とも90メートルという正方形で、寺の面積は

8835平方メートルで、建築面積は3643平方メートルである。その

表門は東向きである。表門から庭に入ると、「前院」と呼ばれる外郭の庭である【写真42】。前院を

通って「内院」の表門に入る。内院の表門には玄関があり、玄関の右側は男性

用、左側は女性用の「水房」の入り口【写真43・44】である。女性用の水房には「小浄」用の施設と「大浄」用の施設を設けている【写真45】。「小浄」用の施設は日本の風呂屋の施設に似ていて、「大浄」はシャワー用の個室である【写真46】。

水房を利用しているのは付近の住民であり、回族もそれ以外の住民も利用する【写真47】。また礼拝以外に利用する人々もいる。このため、礼拝以外に「大浄」施設を利用する場合、使用費を支払う。その収入で寺の水道料金と電気代を支払うのである。ただし、礼拝のために水房を利用する場合は、使用費は無料であるという。



【写真42】常営清真寺前院・2004年3月



【写真43】常営清真寺男性用水房の入口・2004年3月



【写真44】常営清真寺女性用水房の入口・2004年3月



【写真45】常営清真寺女性用水房の内部・2004年3月

「内院」と呼ぶ中庭に入ると、真正面には東向きの大礼拝堂を設けている【写真48】。礼拝堂とつながっている南側の家屋は会議室と接客室で、北側が教長専用の施設である。また、「内院」の裏側の「後院」という裏側の庭では、北側には女性用、南側には男性用の礼拝堂をそれぞれに設けている【写真49・50】。

礼拝などの宗教活動を行う際、阿訇が大礼拝堂においてマイクを使って男性用と女性用の礼拝堂に自分の教えを伝える【写真51・52】。

現在、普段礼拝しにくるのは年配者が多く、毎日平均で100人前後であるが、金曜日の集合礼や重要な行事を行うとき、2000人以上も集まる。寺内には「寺管理委員会」を設けている。寺の運営費用の大部分は周囲のムスリムの「乜貼」によるものである。他には常営郷政府からの援助や寺の売店や水房の収入、および羊や牛の皮を売った費用によるものもある【写真53】。

現在、常営清真寺は「愛国愛教」の看板とされるのみならず、イスラームの国々との友好交流の窓口でもある。1984年以降、モロッコ、イラン、トルコ、パキスタン、インドネシア、サウジアラビアなどの国々のムスリム訪問団や外務関係者が常営清真寺を訪問した。このため、常営清真寺は北京の東部地域における最も有名なモスクとなり、朝陽区の重点文化財とされている。1999年には「全国百座模範清真寺」（全国百軒の看板モスク）の一つとして公布された【写真54】。

11. 新疆ウイグル自治区吐魯番市「東大寺」——カディーム派——

「葡萄城」とも呼ばれる吐魯番市は、新疆の中心部の吐魯番盆地に位置し、七つの郷と



【写真46】常営清真寺女性用水房の大浄施設・2004年3月



【写真47】大浄を終え礼拝に行く回族叔父さん（常営清真寺）・2004年3月



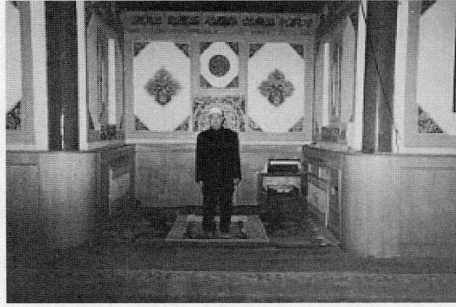
【写真48】常営清真寺大礼拝堂・2004年3月



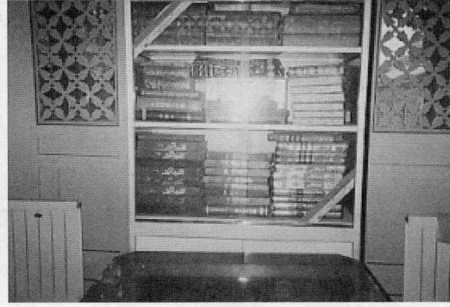
【写真49】常営清真寺女性用礼拝堂・
2004年3月



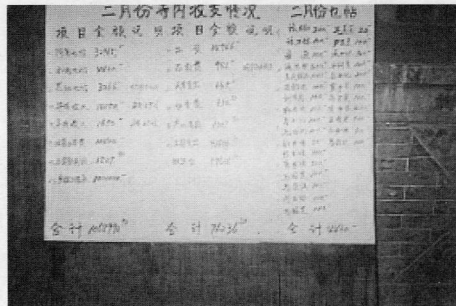
【写真50】常営清真寺女性用礼拝堂で教典を勉強している女性ムスリム・2004年3月



【写真51】阿訇（常営清真寺大礼拝堂にて）
・2004年3月



【写真52】常営清真寺阿訇所有の教典と関連書籍・2004年3月



【写真53】常営清真寺2004年2月分収支表
・2004年3月



【写真54】「全国百座模範清真寺」のプレート（常営清真寺）・2004年3月

二つの鎮、二つの農場、一つの大規模な開発会社を管轄している。吐魯番市の総人口が約25万であり、そのうち回族が約18,000人で、総人口の8%を占めている。市内には回族とウイグル族の清真寺があわせて24ヶ所ある。大規模の清真寺は7ヶ所あり、すなわち一つの郷には一つの大規模のモスクがある。

吐魯番市の回族の由来は、四つのルーツに遡れる。その一つは、清代乾隆年間における

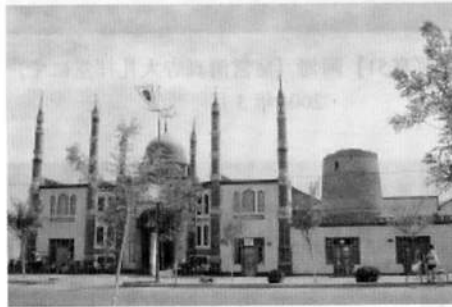
当時の「移民実辺」（辺境に充実させるための移民）のもとに、当時の陝西省、甘肅省（現在の寧夏を含む）青海からやってきた回族移民の後裔、もう一つは、同治年間の陝・甘・寧・青地域の回民起義が失敗した後、新疆に移動してきた回民の後裔、三つ目は、1933年、西北軍閥の若い将領馬仲英が吐魯番市を拠点にして、10,000人あまりの回族兵士を指揮し、新疆南部に進軍したが、一部の兵士が吐魯番市に留まった部分、四つ目はその後ばらばらにやってきた西北部の回族、という四つのルーツである。この4ルーツにより現在の吐魯番市の回族は構成されている。

同治年間において、吐魯番市の回族が急激に増加して、1872年市内の「回城」（新城とも呼ぶ）の垂尔郷（牙尔郷とも記する）に居住していた各地からやってきた回族が共同で「新城東大寺」を建築した。そのうち陝西と甘肅からやってきた回族の比率が高かった。東大寺は文革中に破壊を受けたが、その大部分は保護された。現存する東大寺は1980年代以来漸次改修されたものである。

「東大寺」の表門はアラビア風に建築されているが、表門から入ると中国古典風の四合院の建築である【写真55・56・57】。

「東大寺」は「大坊」とも呼ばれるカディーム派の清真寺であり、「紀門」と「周門」という二つの系譜によって継がれてきている。

「紀門」の創始者である紀明新は、陝西省西安の出身の回族である。乾隆五十一年（1786年）より、彼が吐魯番に布教し始め、その後その弟子が彼を師として尊び、次第に「紀門」を形成した。彼を継いだのは息子の紀恭全であった。紀恭全の息子記魁がのち「周門」の創始者の周満海の婿となった。それ以来、東大寺が「紀門」と「周



【写真55】吐魯番東大寺外観・2004年6月



【写真56】吐魯番東大寺・中国風建築の礼拝堂（東向き）・2004年6月



【写真57】吐魯番東大寺礼拝堂内部・2004年6月



【写真58】紀門阿訇紀洪秀・2004年6月



【写真59】周門阿訇周德新・2004年6月

門」という二つの系譜によって受け継がれてきていた。

「周門」の初代イマムは周満海（1814-1902年）であった。周満海は陝西省西安に生まれ、30歳の頃にはすでに有名な阿訇となっていた。同治年間の西北地域における回民に対する弾圧とその後の一連の動乱から逃げるために、すでに55歳であった周満海は、新疆まで遷移し、終に吐魯番で定着した。その後、その学識が当時の清朝の吐魯番の地方官に賞賛され、彼の布教を認めるに至った。周満海がその後新疆の北部まで布教活動を広めたため、彼の教えによって次第に「周門」という支派を形成した【写真58・59】。

紀門と周門の関係、およびに東大寺の「紀門」と「周門」の歴代イマム、および「馬門」との関連について、資料に基づいて【表2】にまとめる。

【表2：東大寺歴代イマムにおける「紀門」・「周門」・「馬門」の系譜】

紀門の系譜	周門の系譜
紀門の初代は紀明新、陝西省西安の出身の回族。乾隆五十一年（1786年）吐魯番布教開始。老城の東郊外の山西廟の付近にある清真寺で活動。	
紀門の二代イマムは紀明新の息子紀恭全であった。	周門の初代は周満海（1814-1902年）陝西省西安出身の回族。同治十一年（1872年）吐魯番に布教活動を開始。亜爾郷で東大寺を建設、東大寺初代イマムとなった。
紀門の三代イマム記魁（1855-1933年）紀恭全の息子。後周満海の婿となり、周満海と同時に東大寺のイマムを務めた。	周門二代イマムは周満海の次男である周振東（1864-1941年）であり、周二爺とも呼ぶ。布教活動の拠点を吐魯番の「大東寺」から、ウルムチ市の北部にある昌吉地区の奇台に移した。その後、五代のイマムをも務めた。同じ時期において記魁もイマムを務めた。
東大寺三代イマムは馮定国で、二年未滿でウルムチに移転。その後周満海の孫周広林が1933年まで第三代イマムを務めた。その間、記魁が1933年までイマム勤めた。	1940年、周振東が盛世才の宗教弾圧で「陰謀暴乱」（暴動を企む）という罪名を着せられ、逮捕され、翌年72歳で獄中に亡くなった。
1933年周門二代イマム周振東が五代として務める。記魁の息子である紀元章（1896-1945年）が紀門四代イマムを継いだ。	

紀門四代イマム紀元章が周廣林と同時に東大寺イマム務める。 1940年「新疆回族文化促進会総会」を成立し、紀元章が委員長に選出された。1945年紀元章が歿。	周満海の孫、周振東の姪である周廣林（1879-1945）が周門三代イマム務めた。
紀元章の長男である紀洪芳が紀門五代イマム継承。 1945-1952年周廣林の長男周明泰が周門四代イマム継承。二人同時に東大寺のイマムを務めた。	周門四代周明泰（1902-1978年）周廣林の息子であり、ウルムチや昌吉や吐魯番で布教活動を行った。文革中では被害を受けながら、布教活動も続けていた。
1953-1955年まで著名な回族宗教学者馬良駿（馬門の創出者）が東大寺第八代イマムを務めた。 1945年紀元章が歿後、馬良駿が「新疆回族文化促進会総会」委員長に選出された。 1956-1957年馬門の馬永貞大東寺九代イマム。 1958-1962年馬門の舎玉林大東寺十代イマム。	
1963-1983年張永禄が大東寺十一代イマムを務める。	周門五代周明月で、周廣林の息子。
1983-1985年馬順真が大東寺十二代イマムを務める。	
現任イマムは紀門第六代の紀洪秀、紀元章の末子である。	周門六代周徳新で、周明月の息子。吐魯番市輕工業化学工場長をも務めている。

表2に提示したように、東大寺は「紀門」と「周門」さらには「馬門」という三つの宗派によって祭られた宗教機能をもつが、その特徴は下記のように特徴づけられる。

i) 東大寺は紀・周両門の婚姻関係によって結ばれた同族宗教連合である。

両宗派ともに東大寺の阿訇を務めてきたのは、両宗派が一つの姻戚だからである。たとえば、紀門の三代阿訇の記魁が東大寺の創始者である周門の周満海の婿となっても、紀門の歴史の長さから、紀門の地位が低められることはなく、記魁が周門の一、二、三代の阿訇と同時に東大寺を祭ったことはその証明である。

ii) 「紀門」と「周門」のどちらの継承制度においても、同族の出身者によって世襲的に継承されることである。

iii) カディーム派により維持される。

1950年代以来、カディーム派馬門を創始した馬良駿は東大寺を拠点としながら、周門と並行的に東大寺を祭った。この点からすれば、東大寺はカディーム派によって共通して維持されてきたが、他の地域におけるカディーム派の教坊間の教務を干渉しない様相とは異なるケースを呈していた。これは、中国のカディーム派において、新



【写真60】吐魯番ウイグル族清真寺外観・2004年6月

疆の東大寺が極めて重要な位置を占めていることを物語っている。

調査時点（2004年夏）まで、東大寺は、平日には毎日100人あまり、金曜日の集合礼では300人余りが礼拝にくる。1995-7年の間、東大寺は学僧10人を養成したが、以来募集枠を得てないので、現在学僧はない。吐魯番市の清真寺の学僧養成は、市宗教局によって人数を限って認められている。

また、著者は吐魯番市内にあるウイグル清真寺を訪問することができた。回族の東大寺と比べてみると、ウイグル族の清真寺に使用している文字は、アラビア文字とウイグル文字のみで、漢字は使用していない。建築もアラビア風格とウイグル風格とが混成して。そして、東大寺には回族の年寄が一杯集まっていたが、ウイグル族の清真寺にはたいした人数は集まっていなかった【写真60・61・62・63・64】。

なお、1961年吐魯番市が、吐魯番市牙爾郷の区画内にムスリム共同墓地を設けた。共同墓地の南側はウイグル族用、北側は回族用というように区画されている【写真65・66】。



【写真61】吐魯番ウイグル族清真寺礼拝堂入口・2004年6月



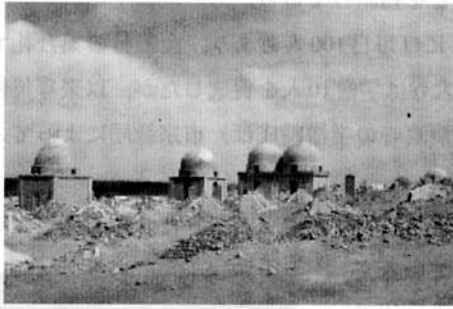
【写真62】ウイグル文字の礼拝時間割表（吐魯番ウイグル族清真寺礼拝堂入口に掲示）・2004年6月



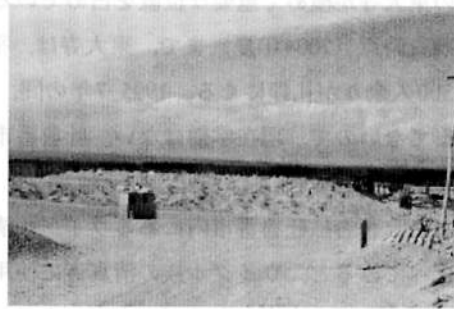
【写真63】ウイグル族満拉（吐魯番ウイグル族清真寺）・2004年6月



【写真64】吐魯番ウイグル族清真寺の先生と生徒・2004年6月



【写真65】吐魯番ムスリム共同墓地の
中でのウイグル族墓地・2004年6月



【写真66】吐魯番ムスリム共同墓地の
中での回族墓地・2004年6月

考察

1. 回族ムスリムにおける精神世界の二重性

中国の回族は社会的には中国人であり、宗教的にはムスリムであるという二重的な身分を持っている。その結果としての二重的な精神世界はさらに重層的に構築されている。それらの特色を下記にまとめる。

第1に、中国の回族は皆ムスリム同志であるという宗教的連帯意識を強くもっている。それらを下記に整理してみよう。

- 1) 社会的な上層部（幹部やインテリア・企業家）が、同じ地域に暮らしていなくても、または、その宗派が異なっても、彼らの間では、社会的ネットワークが維持されている。
- 2) 回族内部では、その内部における多岐に渡る宗派に対して異なる見識を持っているが、お互いの教派を批判や干渉することはしない。
- 3) 回族は皆ムスリムとしての歴史を共有している。回族の内部においては、人々は社会的・経済的に分化されているが、「天下回回是一家」（天下の回回是一家である）という諺に示されるように、「回族」という歴史を共有し、その歴史、とくに苦難の歴史に対して共通の認識を持っている。たとえ、宗派が異なっても、回族に関わりのある歴史的な事件、たとえば、清代の回民起義や歴史上の代表的な人物についての評価については一致している。
- 4) 回族と同様なイスラーム信仰を持つウイグル族などにおいても、回族をムスリム同士として認めており、よほどの宗教研究者でない場合、回族の教派を批判することはしない。イスラーム教は彼らの共通の信念とされている。
- 5) 中国人である回族は、その他のイスラームの国々のムスリムに排斥されることはない。回族自身においても自らがイスラーム世界の一員であり、しかも敬虔なムスリム

に間違いないと認識している。中国化された者といわれることを恐れている回族は、むしろどの国のムスリムよりも、イスラームに対しては敬虔的な信仰心を持っているといってもよい。

第2に、同じムスリムであっても、中央政権や政治との関係が重層的に構築されている。

- i) 歴代の王権や中央政治と平和的關係を築いたのは正統派とされるカディーム派であり、それと対照となったのはスーフィズム諸教団である。これは後述するそれぞれの宗派の清真大寺の運命にもはっきり現れている。
- ii) スーフィズムの信者の「愛国心」には、政治との関わりの度合によって、二重的な様相を構築されていることが読み取られる。

第3に、中国の回族は愛国愛教という二重のアイデンティティや二重の準拠を持っている。それを下記にまとめてみよう。

- i) 無神論を唱える共産党のメンバーになっている回族は、共産党員でありながら、イスラーム教に対する批判はせず、イスラーム教に理解のある態度を取っていて、さらにはイスラーム教に準拠して行動する。
- ii) 愛国という立場に立ち、宗教を口実にして祖国を分裂する行為は、宗教(イスラーム)的行為ではないと強調されたことも、その二重的準拠を示す代表的存在である。すなわち宗教の正当性を強調するのには、愛国という正当的立場に立つにほかならない。
- iii) 都市部の回族も田舎の回族も、清真寺は彼のムスリムという身分を示すための唯一の空間として、彼らにとって、清真寺はなにより重要なイスラーム教的シンボルとなっている。このため、田舎や都市部の回族は、皆清真寺を囲んで暮らしている。

2. 清真寺に見る中国イスラーム教の空間構築

前述したように、寧夏や新疆の回族の清真寺や拱北には、建築上の定まった規格や形式がなく、過去から現在に到るまで、増改築を繰り返しながら発展してきているために、創設時の形式が保たれることもあれば、改築されたケースもある。また、いずれの清真寺においても、その外観は中国的に建築されていると同時に、その中身はイスラーム教的に構築されていることも事実である。すなわち、外観は中国的、中身はイスラーム教的であるということこそが、回族における清真寺の特徴であるといえる。その特色を下記に整理する。

- i) 外観からみると、回族の清真寺や拱北のほとんどが中国古典建築様式によって建設され、とくにその庭は中国古典的な「三合院」や「四合院」の構図を取っている。また、建物内に掛けられている看板やプレートなども漢文字のものが多く、しかしながら、同時に、いずれの清真寺においても、それらのシンボルとされている礼拝堂、すなわち本来の意味での礼拝の空間である礼拝堂の内部は、イスラーム的に飾られ、配

置されている。寺による違いはあるが、基本的には説教ミンバル、『クルアーン』が置かれる書見台、各種の絨毯を揃えている。また、礼拝堂の付属施設である礼拝のときの呼びかけ用の「邦克楼」や「宣礼楼」や「水房」も備えている。

- ii) 中国伝統的な「座北朝南」という伝統的な建築とは異なり、大部分の清真寺は「座西朝東」のように設けている。きわめて少ない例外を除けば、清真寺全体の表門、および礼拝堂の表門は皆東側に向って設けられている。それとは対照的に西側には門を作らず、そしていずれの礼拝堂の西側の壁にも「天房」と呼ばれるメッカの「聖殿＝カーバ al-ka' ba」を示す掛け物が掛けられている。つまり、「西」という方向は回族ムスリムの「聖地」の象徴である。
- iii) 回族の清真寺は、イスラーム教世界におけるもっとも重要な宗教建築である礼拝堂の必須条件、すなわち信者を収容できる十分な礼拝用の空間が確保されていて、世界中に現われている多様なモスクを構成する一部となる。このため、北京の下坡清真寺や常営清真寺のように、その外観はいくら中国古典建築的に作られていても、イスラーム諸国の人々がそれを拒否することはない。また、寧夏の清真寺も近年、イスラーム圏の国々の人々の礼拝や見学の場所となった。
- iv) 回族の清真寺は、イスラーム教が中国に入ってくる以前の伝統を、中国の風土、中国が提供できる建築材料、創設者の興味や創始年代に組み込んで建築されたと考えられる。これは、イスラーム教が中国化された側面を読み取れるが、イスラーム教を中国本土に浸透し活発化するために採択された手段として、イスラーム教と中国文化との融合し合った合理的結果であるといった方が客観的である。

3. 清真寺にみる中国イスラーム諸派の歴史とその政治的運命

前述のように、回族の清真寺における構成史、すなわちこれら清真寺の創設時・破壊期・増改築期は中国全体の歴史過程、および回族内部の宗派の歴史と密接に関わっている。それを改めて表にまとめてみよう。

【清真寺の創設時・破壊期・増改築期と形式】

清真寺とその創設時	建国前		建国後	
	破壊時期	増改築時期	破壊時期	増改築時期
納家戸清真寺 スーフィ・フフィーヤ派 明嘉靖三年（1524年）	乾隆年間 同治の回民起義	清代末期 1930年代後半	1960年 他用され	1984年 1988年より全国 重点文化財と指定
呉忠清真寺 スーフィ・フフィーヤ派				アラビア風 建設中

同心清真大寺 カディーム派 明代初期		明代万暦年間 清代乾隆年間 清代光緒年間		中国古典風 1958年より自治 区重点文化財指 定
洪崗子清真寺 スーフィ・フフィーヤ派 1893年		1937年	1960年代 文革期	1980-90年代 アラビア・中国 古典風
吳忠板橋道堂 スーフィ・ジャフリーヤ派 18世紀	同治の回民起義	1920年代	1960年代 文革期	1980年代 中国古典風
洪樂府道堂 スーフィ・ジャフリーヤ派 乾隆末期	同治の回民起義	1920年代	1950-60年代 反右派・文革期	1989年 中国古典風
韭菜坪清真寺 スーフィ・ジャフリーヤ派 19世紀末期			1960年代 文革期	1980年代 後半・中国風・ 県重点文化財
沙溝道堂 スーフィ・ジャフリーヤ派 19世紀末期		1920年代	1960年代 文革期	980年代 中国・アラビア 風
下坡清真寺 カディーム派 康熙初年				1984年 中国・アラビア 風
常營清真寺 カディーム派 明正徳年間（1506-21）		清嘉慶年間		1983-93年 1998年 2004年
吐魯番東大寺 カディーム派 1872年			1960年代 文革期	1980年代

清真寺の繰り返される破壊と増改築およびその形式の変化からは下記の特徴が見られる。

- i) 中国イスラームの正統派と認識されるカディーム派の清真寺は、明代と清代初期に建築されたものが多く、明・清時代における増改築も多い。清代においても被害を受けなかったと見られている。この点ではスーフィズム諸教団とは顕著に異なる。また、カディーム派の同心清真大寺・下坡清真寺・常營清真寺は中国共産党の革命史や抗日活動と関わっていたので、「重点文化財」や「愛国愛教」の模範とされている。
- ii) カディーム派の清真寺に対し、スーフィ・ジャフリーヤ派の清真寺や道堂の歴史と現状からすれば、清代、そして建国後においてもスーフィ・ジャフリーヤ教団は受難の歴史を経てきたように見える。

例外的に民国時代においてジャフリーヤ派の振興期があったのは、民国政府がかつての満州政権に反抗してきたジャフリーヤ派の立場を賞賛する徴といえる。現在、寧夏の場合、スーフィ・ジャフリーヤ派の清真寺が満拉を養成するケースは少ない。またジャフリーヤ派に与えるメッカ巡礼に参加者の枠も少ない。

しかしながら、スーフィ派の洪崗子清真寺は1930年代の中国共産党の革命史と関わっていたため、その教祖らは国家政府の要人になった。同じ理由から洪崗子清真寺が1980年以来大規模に建築できた要因の一つである。スーフィ信仰と国家政治両者がどのように調和を取るのか意味深い課題となる。

- iii) 建国後の増改築のほとんどは1980年代以降であることは、1980年代以来の国家政府が宗教活動に対しての政策を緩やかにしてきたことの証である。
- iv) すべての清真寺には「管理委員会」が設けられていて、「寺管会」と呼ぶ。「寺管会」の会長はその清真寺の教長阿訇が担当している。内部には治安・財務・教育・施設管理委員という分担に分かれ、構成員は5名がほとんどである。委員は教長・信者の中で権威のある長老、行政のメンバーからなるが、1980年代以前の政府の宗教部門による一括化の管理より、宗教職能者に宗教活動や宗教管理の権限をより一層与えることになった。
- v) 寧夏では近年清真寺を相次いで増築しているように見える【写真67】。吳忠清真寺のように、清真寺の新築や改築のいずれも行政関係、経済水準、市場経済の競争能力に関係している。また清真寺が観光資源として開発されるケースもある。これは寧夏回族における宗教活動を市場経済と結び付けた新たな現象といえる。

4. 清真寺にみる宗教的・社会的機能について

清真寺の歴史からその周辺に居住している回族の歴史的由来がわかる。宗教的機能として、モスクはそれぞれの教派と教団の象徴として設置されている。教派や教団に属している回族が自分の教派の拠点として設けられている特定のモスクに通い、宗教活動を行う。ひとつの清真寺は一つの宗教コミュニティの象徴であるといえる。

礼拝活動については、都会部と農村地域に共通点が見られる。

- i) 仕事などに追われている回族の中年、青年層が平日に清真寺において礼拝することは少ないが、金曜日の集合礼に参加する人が多い。ただし、礼拝時間でさえあれば、礼拝をするのが回族ムスリムの共通点である。我々と同行していた寧夏社会科学院の回族出身の学者や幹部が金曜日の集合礼を行う清真寺において礼拝に参列したことがあった【写真68】。
- ii) 平日に清真寺において礼拝をするのは年配者が多い。また年配者が平日に清真寺に集まって経典を学んだり雑談をしたりするのが好まれるように見られる。清真寺は年配者の交流し合う場でもある。これがインタビュー〔1〕と〔2〕からも分かった。
- iii) 清真寺は宗教学校の機能を持つ。近年、寧夏や新疆ともに、自治区政府が清真寺に計画的に宗教職能者（特に）満拉を養成する権限を与えるようになった。洪崗清真寺の



【写真67】寧夏農村の清真寺・2004年9月



【写真68】寧夏同心中寺の金曜日の礼拝
(中には都会部回族幹部もいる)・2004年9月

- 「アラビア語学校」のように宗教經典をテキストとするケースもある。また清真寺の滿拉やアラビア語学校の生徒のほとんどが大規模な經學院の進学を目指している。いずれにおいても清真寺に寄宿して勉学しているのが共通である。
- iv) 新疆の回族清真寺の由来は西北部の回族に関わっている。とくに清代の同治年間の回民起義に関わる。また、清真寺に関する記録や個人のインタビューでは、同一宗派の組織図すなわち、総本山と支流がはっきりしている。
- v) 清真寺は回族ムスリムの生活の拠点である。回族には「そこに清真寺があれば、そこに回族がいる；そこに回族がいれば、そこに清真寺がある」という言い方がある。彼らが所属する教坊の拠点である清真寺を中心にその周辺に集中的に居住している。そこに居住する回族が、たとえ、普段モスクに通うことはないとしても、結婚や葬式、祖先の命日や忌日および子供の經名命名や割礼などの儀式を行う際、モスクに行くか教長を当事者の家庭まで呼んで、儀式を挙げる。寧夏納家戸村の回族村民の家の「尔麦里」や北京の下坡清真寺は葬儀所でもあるのがその一例である。
- vi) 都市部の回族も田舎の回族も、清真寺は彼のムスリムという身分を示すための唯一の空間として、彼らにとって、清真寺はなにより重要なイスラーム教的シンボルとなっている。

以上を踏まえ、回族の清真寺における今後の課題としては、下記のように考えられる。
第一に、清真寺を祭る宗教組織の社会的な性質について。

スーフィ派における教祖の世襲制、その信者集団と他の教団とのはっきりとした空間的な境界、または、カディーム派の場合でも、一つの清真寺は一つの独自の教坊として、他の教坊との間では何のつながりもない構成、というような組織構造は、それぞれの清真寺を祭る信者集団はひとつの拡大血縁組織＝宗教的同族連合でもありと考えられる。新疆吐魯番東大寺を祭る「紀門」と「周門」のように、清真寺を祭るのは同一教団というよりは同族連合といった方が客観的である、すなわち、一つの教団は一つの拡大親族集団でもあ

るといってよい。これに関する実証研究は今後の課題とする。

第二に、清真寺と行政の関係図について。

回族の清真寺は宗教的な集団にとって、社会的コミュニティの拠点でもある。寧夏の行政村や北京の常営郷、下坡居民委員会のいずれも清真寺を祭る信者集団を基礎として行政区画とされたのである。清真寺は一つの地縁組織のシンボルとでもいえる。清真寺と行政の間関係図を明らかにすることも今後の課題となる。

結語

回族が中国という文化的政治的な環境において、重層的アイデンティティ（自己認識）を持ち、独自の精神的物理的空間を作り出すに至っている。その重層的アイデンティティや独自の空間は、中国という環境を旨く調和した上で並行的同時的に存在しているわけである。中国にとって回族は異文化の使者であれば、イスラーム世界にとっては、回族は中国とイスラーム世界を有効的に結びつつあるもっとも重要な絆となり、イスラーム世界の秩序を保全し、再構築するもっとも重要な要素でもある。

清真寺は回族のシンボルであり、回族の歴史・信仰生活・内部秩序・中央政治との関係を雄弁に現している。清真寺は回族をイスラーム世界と結びつける絆となりながら、イスラーム教に対する多層的価値観による解釈可能性も表している。

固定観念化された中国やイスラーム世界のイメージと異なって存在する回族は、中国・イスラーム両範疇下においてどのように位置づけられるのか興味深い課題となる。それは、回族の独自の自己認識と独自の空間の構成史を、中国全体の歴史とイスラーム世界の歴史の二つを踏まえて鳥瞰し、その歴史におけるさまざまな力学を重視するという視点が要請されるということを示しているといえるかもしれない。

注釈

- 1) 本研究では、回民社会に関する現地調査への検証として計画されていた。しかしながら、本研究を行う分担者のいずれも教学上の事情があったため、現地研究調査は春・夏休みと教学期間の間隙を利用し断続的に進められることしかほかできなかった。また、現地で行われた調査活動は中国全国イスラーム教協会、寧夏回族自治区社会科学院回族研究所・新疆ウイグル自治区民族事務委員会中国少数民族五種叢書編集委員会や新疆大学、新疆師範大学などの機関からの多大の協力を頂いた。具体的な調査活動は下記の表に示されている。

【現地調査活動の日程】

日程	調査先概要
3月18日(木)	午後：寧夏回族自治区社会科学院訪問・座談会・文献資料収集

3月19日(金)	午前：永寧県楊和郷納家戸村「納家戸清真大寺」訪問 納家戸村回族家庭を訪問・「尔麦里」見学 昼：呉忠市「呉忠清真寺」訪問 午後：同心県「同心清真大寺」訪問 夕方：同心県下流水郷洪崗子村「洪崗子清真寺」訪問・同清真寺現任教祖訪問
3月20日(土)	午前：呉忠市利通区板橋郷に設けている「呉忠板橋道堂」を訪問 昼：青銅峽市峽口鎮仁橋村に設けている「沙溝道堂」を訪問 午後：銀川市回族共同墓地見学 夜：寧夏社会科学院座談会・意見交換
3月25日(木)	北京全国イスラーム協会訪問・資料収集
3月26日(金)	北京朝陽区下坡清真寺訪問・金曜日集合礼見学・資料収集
3月27日(土)	北京回族共同墓地見学・訪問
6月21日(日)	午前：新疆大学西北研究所 午後：新疆ウイグル自治区民族事務委員会訪問・資料収集
6月22日(月)	午後：ウルムチ市内二道橋国際バザールウイグル町見学 夜：五一街見学
6月23日(火)	昼：吐魯番市民族事務委員会宗教局訪問 午後：吐魯番市政治協商委員回族家庭訪問 「東大寺」(新疆回族周門清真寺)訪問 吐魯番市ムスリム(回族・ウイグル族)共同墓地 ウイグル族清真寺見学 夜：ウルムチ市回民風味特色餐庁見学・インタビュー
6月24日(水)	午前：新疆師範大学社会文化人類学研究所訪問・座談会
6月25日(木)	北京大学国際交流学院訪問・資料収集・国際シンポジウム開催問い合わせ
9月20日(月)	寧夏回族自治区社会科学院学院設立25周年記念シンポジウム出席
9月21日(火)	当前回族学・伊斯蘭教研究現狀研究討論会参加・報告(寧夏社会科学院主催)
9月22日(水)	午前：西夏王陵博物館見学・資料収集 午後：銀川市内南関清真大寺・寧夏博物館見学・資料収集
9月23日(木)	午後：海原県董業坪コンバイ訪問・見学 夕方：西吉県沙溝清真寺・コンバイ見学 夜：沙溝回族村民家庭訪問
9月24日(金)	午前：西吉北大寺(馬崇礼阿訇)食事・見学・訪問 午後：同心清真中寺見学・金曜日集合礼見学 楊万宝阿訇訪問 同心県アラビア語学校見学 夜：銀川戻り、寧夏社会科学院同人座談会にて意見交換
10月24日(月)	北京大学シンポジウム参加・鈴木司会・報告
10月25日(火)	北京大学シンポジウム参加・樋口・高報告
10月26日(水)	午前：北京牛街礼拝寺訪問 全国伊斯蘭協会訪問・中国イスラーム経学院見学 午後：牛街ムスリムスーパーマーケット見学・北京回族墓地見学

- 2) 寧夏歴史において、海原大地震は「民国海固大地震」とも呼んでいる。1920年12月16日、海原県を中心に起こした地震は8.5級であり、中国史上において最強な地震とされている。西北各省50余りの県が同時の強烈な被害を受けた。周辺1000キロメートル範囲でも被害を受けていた。23万人が死亡した。当時の『中国民報』などの報道によれば、海原県だけでも死者7万人が出たという。『寧夏百科全書』p. 222に拠る。
- 3) 「馬家坟」は「馬一族の墓地」と直訳され、あるいは説明するが、「馬家坟」は、単に「馬」という苗字を持つ一族のみ利用される墓地ではなく、すべての回族を利用することができる共同墓地である。「馬」は、メハammedの第一音節の「メ」を当て字にされたものである。ほとんどの回族はメハammedの子孫であるという認識を持ち、またメハammedを記念するために、「馬」を苗字として用い

ていて、回族共通的な苗字となっている。

- 4) 分扣者の高が、1982年10月、北京市社会学会に企画された北京市少数民族社会調査というプロジェクトに参加し、回族の集中地である常営郷を調査した。当時、常営清真寺は崩壊されまま、回復されなかった状態であった。清真寺全体は小さくて普通の家屋とは変わらず、灰色で古くてほんの少しだけの煉瓦しか見られないという印象しか残されなかった。見学もできなかった。そのとき、雲南省から北京の大学に進学している同じ教派の二人の回族学生が食物や礼拝の便利さなどからそこを宿舍として利用していると聞いた。2004年再び訪問したところ、常営清真寺の眼花缭乱的な大きな変化が印象に残っていた。

(参考図書・出版順に拠る)

- 新疆昌吉回族自治州政治協商委員会文歴委員会編・印刷 1988年『昌吉回族和伊斯蘭教』。
 張承志著 1993年『回教から見た中国 民族・宗教・国家』中公新書。
 張承志著・梅村坦編訳 1993年『殉教の中国イスラーム』亜紀書房。
 韓斌・馬素坤・王平編著 1995年『新疆回族史綱要』(内部発行版)。
 中国人民政治協商會議吐魯番市委員会文史資料委員会編 1995年『吐魯番文史』(第四輯：回族特輯・内部発行)。
 金宜久主編 1997年『伊斯蘭教辭典』上海辭書出版社。
 任繼愈主編 1998年『宗教大辭典』上海辭書出版社。
 寧夏百科全書編纂委員會編 1998年『寧夏百科全書』寧夏人民出版社。
 宋志斌主編 1998年『一個回族村的当代變遷』寧夏人民出版社。
 丁克家ほか著 1998年『尙世吉慶——中国伊斯蘭虎非耶洪水——』寧夏社会科学院。
 昌吉回族自治州州民族宗教事務委員會編印刷 1998年『昌吉民族和宗教』。
 李興華ほか合著 1998年『中国伊斯蘭教史』中国社会科学出版社。
 本書編者組編著 2000年『中国新疆地区伊斯蘭教史』新疆人民出版社。
 馬平・馬金宝・丁克家編著 2000年『寧夏清真寺』寧夏人民出版社。
 白寿彝主編 2002年《回族人物志》(上)「元代」卷二・卷三 寧夏人民出版社。
 续西发著 2001年「新疆世居民族概覽」民族出版社。
 佟洵著 2002年『伊斯蘭教与北京清真寺文化』中央民族大学出版社。
 編集代表・片倉もところ 2002年『イスラーム世界事典』明石書房。
 何克検ほか編著 2003年『回族穆斯林常用語手冊』寧夏人民出版社。
 華立著 2003年「清代甘肅・陝西回民の新疆進出——乾隆期の事例を中心に——」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態——中国の周辺地域の歴史と現在』所収 風響社。
 劉偉主編 2004年『寧夏回族歴史与文化』寧夏人民出版社。
 中華人民共和國民政部編『中華人民共和國行政区划簡冊』2004年版 中国地圖出版社。
 宋志斌 張同基主編 1998年『一個回族村的当代變遷』寧夏人民出版社。